

エリゼの植物について

——『新エロイズ』第四部手紙11の読解——

田 中 恒 寿

初めに

サン＝ブルーとジュリという二人の若い男女のかなわぬ恋を描いたジャン＝ジャンク・ルソーの書簡体小説『新エロイズ』は、主人公たちの情熱的な恋物語をはぐくむと同時にその内面と共鳴する自然のみずみずしさにおいて、フランス18世紀の文学中際立った存在である。特に第四部手紙11のエリゼのエピソードの読者は、おそらく誰もその豊かな植物相に驚きを禁じ得ないだろう。鬱蒼としげる植物群は、そこで繰り広げられる人間のドラマの舞台にふさわしい錯綜した空間を提供すると同時に、もう一人の登場人物に数え上げてもおかしくないような一種独特の性格を帯びた存在として読者の前に現れてくる。小論はそのような、単なる背景や装飾である以上に、登場人物の激しい感情の動きを映し出すエリゼの植物に注目し、それがどういう描かれ方をしているかという分析を通じてエピソードを読み解く試みである。その際私たちは、エリゼの植物が持っている三つの側面を軸として考察を進めていきたいと思う。すなわち、第一は日常社会から切り離された空間へとサン＝ブルーを導く植物の魔術的な力、第二はエリゼを作り出した人為と対立する植物の野生性、そして第三はサン＝ブルーのジュリに対する愛の情念をかきたてる植物の官能性である。

1. 植物の持つ魔術的な力

エリゼのエピソードは、サン＝ブルーが友人のエドワード卿に宛てた手紙という形式を取っているが、多くの部分は地の文よりも、ジュリとその夫ヴォルマル、それにサン＝ブルー自身という三者の対話によって構成されている。出来事は二日間にわたり、第一日目には、クラランに住むジュリとヴォルマルが、それまで秘密にしていた“エリゼ”呼ばれる場所にサン＝ブルー

を連れて行き、それを取り巻く植物、小川、鳥、魚といった自然物を見せて回る。そして第二日目にはサン＝ブルーが一人でエリゼを再訪する。

エリゼと名付けられたこのヴォルマール夫妻お気に入りの散歩道は、家のごく近くにある果樹園 (verger) のことであるが、ここはサン＝ブルーがかつてジュリの家庭教師であった時代にジュリやクレールと一緒に桃の実の投げ合いをした果樹園であり、当時は、「草は乾燥し、木もまばら、木陰がとぼしくて、水もない」ところだった。それが今では、「涼しくて、緑がしたたり、衣装をまとい、装いをこらし、花が咲き、水が流れている。」あまりの変わりように、サン＝ブルーは、そこがかつての果樹園だとは夢にも思わないくらいだ。この変化をもたらしたのは他ならぬジュリであり、ここに手をつけ始めたのはヴォルマールと結婚するよりも前のことで、母親の亡くなったすぐあと、父親とともに孤独を求めるためにここへ来た頃のこととされている。

エリゼは二重の意味で秘密の場所である。その存在がサン＝ブルーには秘密にされていたということはすでに触れた。入り口の鍵は四つしかなく、それを持っているのは、ジュリとヴォルマール、それにジュリの父親と、ときおり監視役としてジュリの子供たちを連れて来る召使のファンションの四人である。庭師のギュスタンでさえ、この四人のうちのどれかと一緒になければ入ることは許されない。実質的にはヴォルマール夫妻のプライベートな空間と考えていいだろう。

加えて外見のうえからも、エリゼは秘密の場所であると言える。人目につきにくい奥まった場所に位置付けられているだけでなく、入り口がどこにあるのかもよく分からないようにされているのだ。そしてエリゼを外見上秘密にするために大きな役割を果たしているのが植物である。

Ce lieu, quoique tout proche de la maison est tellement *caché par l'allée couverte qui l'en sépare qu'on ne l'aperçoit de nulle part. L'épais feuillage qui l'environne ne permet point à l'œil d'y pénétrer*, et il est toujours soigneusement fermé à la clé. A peine fus-je [Saint-Preux] au-dedans que *la porte étant masquée par des aulnes et des coudriers* qui ne laissent que deux étroits passages sur les côtés, je ne vis plus en me retournant par où j'étais entré, et n'apercevant point de porte, *je me trouvai là comme tombé des nues*. (p. 471)²⁾

木の茂みは外側からの視線を遮断するのみならず、内側からも外界とつながる唯一の接点である戸口を覆い隠している。すなわちこの木の茂みは、内からも外からもエリゼをクラランとは切り離された空間たらしめているのだ。エリゼへと導く入り口は、まさしくおとぎ話によく見られる異界への入り口のようにあり、クラランという日常世界からの論理的・空間的連続性を断ち切る役目を果たしている。それゆえサン＝ブルーは、不意に——文字通り読めば「雲の上から舞い降りたように」——エリゼの中に迷い込んだような感じを受けるのである。

エリゼに一步足を踏み入れたサン＝ブルーは、環境の変化のあまりの大きさと急激さに不意打ちをくった格好で、われにもあらずある種の熱狂的な陶醉を覚えている。

Surpris, saisi, transporté d'un spectacle si peu prévu, je restai un moment immobile, et m'écriai dans un enthousiasme involontaire: «O Tinian! o Juan Fernandez! Julie, le bout du monde est à votre porte!» (p. 471)

サン＝ブルーはエリゼを、ティニャン、ホアン・ファルナンデスといった南海の無人島と取り違え、「世界の果て」と断定する。ところが、本当は無人島でもなんでもなく、昔からあった果樹園をジュリが作り変えたものにすぎないのだ。ジュリは「魔法 (enchantement)」という言葉を使って、サン＝ブルーの歓喜 (enchantement) を見事に言い当てているが、実際サン＝ブルーの過剰な反応は、あたかも植物が生み出す空間の異質性に魅せられてしまったかのようだ。

サン＝ブルーの目に映るのは、人間の手によって飼い慣らされた果樹園とはほど遠く、「自然界の中で最も未開の、最も寂しい」光景ばかりであり、彼は「自分がこの人里離れた無人境 (désert) に足を踏み入れた最初の人間」であるとさえ感じている。野生のままに打ち捨てられたように見える自然は、「秩序に対する生来の愛」を唯一の行動原則とするヴォルマールによって管理されたクラランの秩序と対照的である。「一直線にそろえられたもの、平らにならされたものは何一つない」エリゼでは、整然とした幾何学庭園とは異なり、植物の外観は雑然とした多様性による魅力をかもし出している。

Je [Saint-Preux] voyais ça et là sans ordre et sans symétrie des broussailles de roses, de framboisiers, de groseilles, des fourrés de lilas, de noisetier, de sureau, de seringas, de genêt, de trifolium, qui paraient la terre en donnant l'air d'être en friche. (p. 473)

またたくまに異質な世界にやって来たと言う印象は、「無人境」、「世界の果て」、「無人島」などと、言葉を変えて、最後までサン＝ブルーに付きまとうことになるのだが、このことは、エリゼがクラランの内部にありながらも、ヴォルマールの理性によって効率的に支配されるクラランの論理から外れた場所として、サン＝ブルーの前に立ち現れたということを示していると言ってよいだろう。

入り口が自然の木立ちで隠されていたように、エリゼの周囲もまた、人目でそれとわかる囲いではなく、自然の林や茂みに見せかけた囲いによって囲われている。

«Ces deux côtés, continua-t-il [Wolmar], étaient fermés par des murs; les murs ont été masqués, non par des espaliers, mais par d'épais arbrisseaux qui font prendre les bornes du lieu pour le commencement d'un bois. Des deux autres côtés règnent de fortes haies vives, bien garnies d'érable, d'aubépine, de houx, de troène, et d'autres arbrisseaux mélangées qui leur ôtent l'apparence de haies et leur donnent celle d'un taillis.» (p. 479)

このような、明確な仕切り（人工的な垣根）を取り除く工夫によっても、エリゼの散歩道があたかも自然の森の中を通っているような印象を与えることが可能になる。サン＝ブルーにとってエリゼはあくまで未開の森、すなわちクラランを形作る人間社会の論理の及ばない自由な空間なのであり、クラランの秩序から逃れる「避難所 (asile)」なのである。この認識は「無人島」、「世界の果て」と、いくら言葉を代えてもなんら変わることはない。

サン＝ブルーは小説の中で、多くの場合、定住する場所を持たない気ままな風のような存在として描かれる事が多い。ある時はアルプスの山岳美に魅せられる旅人であり、またある時はメーユリの岩山に隠棲して恋人ジュリのいるクラランを眺め暮らす。なかんずくアンソン提督と世界の海を股にかけける船乗りでもあった。そんな彼であればこそなおさらのこと、世界一周の旅からクラランに帰ってきた第四部において、じわじわと影響力を増してゆくヴォルマルの存在に息苦しさを感じていたことだろう³⁾。エリゼという異質な空間が、ヴォルマルの束縛から逃れる、まさにオアシスのようなものとしてサン＝ブルーの目に映ったとしても不思議はない。エリゼの植物の「魔法」とは、サン＝ブルーの自由に対する願望の表れであるとも考えられる。

2. 植物の野生性

エリゼがどんなに未開の自然のように見えようとも、それはジュリの巧みな技によって可能になったのだという種明かしを、サン＝ブルーは道々聞かされることになるのだが、植物の「魔法」からなかなか抜け切ることができない。この間の対話では、やりとりの表面的な平穏さとは裏腹に、ジュリとヴォルマル、それにサン＝ブルーの間で、目に見えぬ綱引きが繰り広げられている。特に顕著なのは、ジュリ（とヴォルマル）対サン＝ブルーという逆向きのベクトルの対立関係である。

エリゼの植物が持つ一種魔法のような不思議な力によって、世界の果てにやって来たような錯覚を起こし、歓喜にひたるサン＝ブルーに対して、ジュリはその魔法を解き、現実連れ戻そうとさかんに努めている。

«Mais vingt pas de plus les [beaucoup de gens] ramènent bien vite à Clarens : voyons si *le charme* tiendra plus longtemps chez vous [Saint-Preux].» (p. 471)

«Avancez et vous [Saint-Preux] comprendrez. Adieu Tinian, adieu Juan Fernandez, adieu tout *l'enchatement*! Dans un moment vous allez être de retour du bout du monde.» (p. 472)

しかし、サン＝ブルーは、なかなか魔法から覚めようとはしない。それどころか、植物がもたらす眩暈に自からすすんで身をまかせているようでもある。

Je me mis à parcourir *avec extase* ce verger ainsi métamorphosé. (p. 472)

口では「ようやく全部わかりました」と、ジュリの巧みな工夫によって時には密林のごとくにも見える植物群のからくりをすべてを了解したようなことを言っているものの、現実に戻ろうとする気配は一向にない。庭の内部を歩くほどにサン＝ブルーのえもいえぬ快感はいや増していく一方である。

Plus je parcourais cet agréable asile, plus je sentais augmenter la sensation délicieuse que j'avais éprouvée en y entrant. (p. 475)

ジュリは突然、そんなサン＝ブルーを甘美な夢想から引き出し、植物ばかり眺めるのは良くないから今度は鳥を見にいこうともちかける。

Mais Mme de Wolmar me tirant de ma rêverie me dit en me prenant sous le bras : *tout ce que vous voyez n'est que la nature végétale et inanimée, et quoiqu'on puisse faire, elle laisse toujours une idée de solitude qui attriste. Venez-la voir animée et sensible.* (p. 475)

«inanimée」とは、ここでは植物が「(動物などに比べて) 活動的でない、動き回らない」というぐらゐの意味であろう。そして今度は、「活動的で感覚を有する自然」、すなわち鳥を見に行くのである。うっかりすると、そのまま読み飛ばしてしまいそうになる言葉だが、ここには小説の読者にとって見逃すことの出来ない内容がこめられている。ジュリは、あたかも「動きの少ない自然」の心地良さに魅了されるのが罪悪でもあるかのように、サン＝ブルーを甘美な“夢想から引き出し”ているが、これはいわゆる「鳥籠 (volière)」とサン＝ブルーが呼ぶことになる鳥の隠れ家

の方へと彼の注意をそらせるよう仕向けているとも取れないことはない。植物がもたらす「悲しい気持ちにさせる孤独の思い」とは一体何なのだろうか。それは植物一般に対するジュリの意見であるというよりは、エリゼの植物と分かち難く結び付いたジュリの意識感情を表しているといったほうが良さそうだ。すなわち、すでに見たように、エリゼはもともと母の死後、孤独を求めて作られた場所なのである。しかしそれはジュリにとってそうであるだけであり、サン＝ブルーにとっては意味を成さない理屈ではある。

ところがここには興味深い事実が隠されている。小西嘉幸氏がいみじくも指摘している通り⁴⁾、ジュリの母親の死と相前後して、ジュリの心を大きく揺さぶった「愛の種痘 (inoculation de l'amour)」(「第三部手紙13～15」)のドラマが起こっているのだ。このエピソードの顛末は次のようなものである。ジュリが天然痘にかかって床にふせっている間、看病に訪れたサン＝ブルーはジュリの手に接吻し、自らすすんで病気に感染する。おかげで病の癒えたジュリは、あとからサン＝ブルーの献身的な行動を知り、父の決めたヴォルマールとの結婚に従いはするものの、サン＝ブルーへの愛は永遠であることを誓うのである。ジュリがエリゼに手をつけ始めた時期は、ジュリの母が死んだ時期と重なるのみならず、このようなジュリの心の内部に大きな迷いや激しい葛藤が渦巻いていた時期とも重なっている。したがって、エリゼの植物と分かち難く結び付いたジュリの意識感情とは、母の死を悼む思いだけでなく、サン＝ブルーへの決定的な思慕の念でもあると考えることができる。第三部手紙15でジュリはこう宣言している。

Nature, ô douce nature, reprends tous tes droits! j'abjure les barbares vertus qui t'anéantissent. Les penchants que tu m'as donnés seront-ils plus trompeurs qu'une raison qui m'égara tant de fois? (p. 335)

「自然」とはこの場合、人間社会の枠からはみ出る一切のものを意味しているが、とりわけ徳や理性に対立する情念であり、具体的にはサン＝ブルーへの愛を指している。母を死に至らしめた悲しみと父の因習的な頑迷さによって千々に乱れる、ジュリのサン＝ブルーに対する愛情が、エリゼの植物と一体となって切り離せないものであるとするならば、いまやヴォルマールの妻となってしまったジュリが、エリゼの植物への陶醉から一刻も早くサン＝ブルーを引き出して他のことに気をそらそうとしても、それはごく当然のこととして理解できるだろう。

サン＝ブルーが世界の果てと見誤ったように、エリゼの庭はまったく野生の自然らしく見せかけてある。しかし、それは、文字どおり、見せかけてあるのであって、本来あるがままの自然ではない。自然の手が加えられていることを巧妙に隠してあるのであり、これこそがエリゼをエリゼたらしめる基本原理である。ところが興味深いことに、人為を巧妙に隠すという基本原理は、エリゼのみならず、クラランの農場全体を貫くものでもあるのだ⁵⁾。平和と秩序に満ち溢れたクラ

ランにおける使用人たちの管理方法を説いた第四部手紙10に、次のようなくだりがある。

Tout l'art du maître est de *cacher* cette gêne sous le voile du plaisir ou de l'intérêt, en sorte qu'ils [les domestiques] *pensent vouloir tout ce qu'on les oblige de faire.* (p. 453)

すなわち、目に見える強制的な力によって服従させるのではなく、目に見えない配慮によって自発性をうながすが、クラランを管理する際のヴォルマールの技術なのである。

この技術は、エリゼの中でも「鳥籠」とサン＝ブルーが呼んだ場所に、とりわけ明瞭に再現されている。鳥籠といっても金網があるわけではない。エリゼの奥まった場所に鳥たちが住処としている木立ちがあるのだ。このいわゆる「奇跡」は、忍耐と時が作りだしたものとされているが、巢を作るのに適した隠れ家と豊富な餌を与えられて、鳥たちは自発的にそこに集まるように仕向けられているのである。庭の植物もまた同様の技術によって管理されている。サン＝ブルーに言わせれば、エリゼの庭は人間が手を加えなければ現在のようになるはずがないのに、その痕跡 (pas d'hommes) がどこにも見当たらない。その疑問に対して、ヴォルマールは人間が手を入れた跡を消すように大そう注意しているのだと答えている。

«C'est qu'on a pris grand soin de les [pas d'hommes] effacer. [...] On fait semer du foin sur tous les endroits labourés, et l'herbe cache bientôt les vestiges du travail; on fait couvrir l'hiver de quelques couches d'engrais les lieux maigres et arides, l'engrais mange la mousse, ramène l'herbe et les plantes; les arbres eux-mêmes ne s'en trouvent pas plus mal, et l'été il n'y paraît plus.» (p. 479)

その工夫とは、植物の自発性を利用しながら、自分の思い通りの効果を上げるよう、巧妙に仕向けるというものである。このような、人工の跡を隠す技術、いってみれば、「見えざる手」による管理というヴォルマールの基本原理をエリゼにも応用するとういことは、なにを意味しているのだろうか。それはジュリが、ヴォルマールの意図にきわめて忠実であることを示している⁹⁾。サン＝ブルーに対するエリゼの種明かしの第一のヒントとして、ジュリはこう言っている。「私がこの仕事の監督で、夫から好きなように作りなさいとまかされました。」すなわちジュリを監督に任命したのは他ならぬヴォルマールなのだ。ジュリはまったく自分の好みによってエリゼに手を加えることが出来るのだが、結果からみると、エリゼをヴォルマールの趣味に反するものにしようとしなかったばかりか、進んでヴォルマールの意にかなうものに仕立て上げている。サン＝ブルーに向かって、ヴォルマールが自分の理想とする庭園観を述べている箇所を見ると、ヴォルマールの理想とする庭のイメージは実際エリゼそのものであり、あたかもエリゼを作ったのは自分

であるかのように、得々として自説を披歴している。エリゼは、ヴォルマールの原理を応用しながら、ヴォルマールの庭園観を反映するよう、ジュリの手によって作られたものである。

この点からも、エリゼがヴォルマール夫妻のプライベートな場所であるということが確認されるだろう。エリゼを陰で支える人爲性は、ヴォルマールの徳に染まろうとするジュリの妻としての忠実さを映す鏡であり、エリゼは本来ならヴォルマールに向かってのみ開かれているべきものである。しかしサン＝ブルーはそのことに向頓着しないばかりか、なんと愚かしい質問を発してジュリをまごつかせてしまいさえするのである。

エリゼをひととおり巡ったあとで、サン＝ブルーはある疑問を抱く。手間ひまかけてわざわざエリゼを今あるように作り変えずとも、同じように快適な自然の木立が家の反対側にあるではないか、というわけである。この質問に対するジュリとヴォルマールの反応は次のようなものだ。

«Il est vrai, dit-elle [Julie] un peu embarrassée, mais j'aime mieux ceci [l' Elysée].»
«Si vous [Saint-Preux] aviez bien songé à votre question avant que de la faire, interrompit M. de Wolmar, elle serait plus qu'indiscreète. Jamais ma femme depuis son mariage n'a mis les pieds dans les bosquets dont vous parlez. [...] Apprenez à respecter les lieux où vous êtes; ils sont plantés par les mains de la vertu.» (p. 485)

ここでエリゼが現在持っている社会的な意味が明確に示されることになった。家の向こう側にある、素敵な、飾り気のない木立、結婚以来ジュリが一度も足を踏み入れたことのない木立とは、まさしくジュリとサン＝ブルーが初めて口づけを交わした秘密の場所だったのだ。この木立は、いわば、サン＝ブルーへの愛の象徴であり、二人にとっては聖なる木立ちである。それが、新たに作られたエリゼによって断固として否定されている。聖なる木立ちを捨てて、エリゼの庭作りに励むというジュリの選択は、サン＝ブルーを諦めてヴォルマールと結婚したジュリの決断と、まったくの平行関係にあると言えよう。この庭は、サン＝ブルーに対する、ジュリからの頑とした拒絶を示すものであると同時に、夫に対しては、忠誠のメタフォールとなるのである⁷⁾。

したがって、サン＝ブルーがエリゼの野生性を賞賛し、それに酔いしれるということは、そこに込められた社会的な意味を無視し、否定することにもつながる。ジュリがサン＝ブルーを夢想から引き出して現実のからくりを理解させようと努めるのは、夫婦の絆を尊重してもらいたいかからであろう。ところが、サン＝ブルーのジュリに対する思慕の念は、いまだに消え去っていない。それどころか、エリゼの植物の野生性によって、再び情念に火が付いてしまったようでもある。エリゼの植物は、その人爲性においてジュリの貞操の証しとなるものであるが、一方では、その自然性において情念の炎をかきたてる危険をもはらんでいるのである。

エリゼの植物を介在したこの人爲と自然の対立は、人間社会の規範（ジュリとヴォルマールの

夫婦関係)と、そこからの解放を願う情念(サン＝ブルーのジュリに対する愛)の対立として読むことも可能であろう。すなわち、徳と情念の対立・融和という小説全編を貫く主題が、エリゼの植物をめぐる三者の反応の中に繰り返されているのだ。エリゼが人間の手が加わっていない未開の自然だと思い込みたがるサン＝ブルーの誤解を解こうと、ジュリとヴォルマールは、エリゼを今ある姿に作り上げることを可能にしたジュリの巧みな技を明かす。「すべては自然がやったこと」と、自然の自発的な力を強調しながらも、効率よく野生的な外観を得るための画期的な工夫が披露されるが、これは言い換えれば、エリゼの植物に魅せられ、酔いしれるサン＝ブルーの情念を抑制し、ジュリとヴォルマルの徳に基づく人間関係の中にサン＝ブルーを取り込むための説明である。

また、三人の会話の中で問題にされるのは、自然と人為の対立——もしくは「融合」と言うべきか——だが、実際に大きな意味を持つのは、サン＝ブルーの魔術的陶醉と、それに対して現実的秩序の回復を志向するジュリやヴォルマルの言葉(ロゴス)との力関係であるようにも思える。このことはエピソードの終りになっていっそうはっきりするのであるが、このテーマについては第三章で再び問題にしたい。

3. 植物の官能性

本来、夫ヴォルマールに対する忠誠と貞節の証しであるはずのエリゼも、サン＝ブルーの前では植物の自然が彼の自然、すなわち、くすぶっていたジュリへの想いをあおる方向に作用してしまったようだ。ジュリとヴォルマルの種明かしにもかかわらず、サン＝ブルーはなかなか魔法から覚めようとはしない。それどころか、あふれかえる植物に囲まれたサン＝ブルーの陶醉は官能的ですらあるようだ。

そもそもエリゼは、小西嘉幸氏も指摘しているように、西洋文学の長い伝統にのっとった悦楽境(*locus amoenus*)でもある⁹⁾。エリゼに第一歩を踏み入れたサン＝ブルーの観察は、まさしく修辭的に悦楽境の構成要素(日陰、一本もしくは数本の樹木、草地、泉もしくは小川、鳥のさえずり、草花)⁹⁾を列挙しているようである。

[...] d'obscures ombrages, une verdure animée et vive, des fleurs éparses de tous côtés, un gazouillement d'eau courante et le chant de mille oiseaux [...]. (p. 471)

エリゼは基調として、悦楽境の伝統に連なるものであると言えるだろう。クルツィウスによれば、悦楽境は同時に愛の特権的な場所でもあり、*amoenus*(うるわしい)は、容易に *amor*(愛)と一

致するという¹⁰⁾。本来ならこの愛の場所は、ジュリとヴォルマールのものであるはずだが、実のところ、ジュリは心の奥底ではヴォルマールを愛してはいない。ヴォルマールもそのことは承知している。この愛の場所にきわめて正しく反応するのは、皮肉にもサン＝ブルーの方なのである。

「私はこのように形を変えた果樹園をうっとりとして歩き回りはじめました」という一文から始まるエリゼの植物の描写は圧巻で、一段落53行の中に24種類の植物名が登場する。サン＝ブルーのまさに官能的とも言える熱狂振りは特筆すべきであろう。あたかもエリゼが悦楽境にあると同時に、「歓びの楽園 (*paradisus voluptatis*)」であると言わんばかりだ。そもそも庭というものは、もともと性愛を暗示するものであったという¹¹⁾。また、花や果実はたやすく人間の性的な行為を連想させる。エリゼは純然たる庭ではないが、その不規則性と多様性によって、限りなく自然に近い庭と見なすこともできよう。果樹園の有益さを犠牲にしてうるわしい場所に作り変えられたエリゼでは、つる草に虐げられていてさすがにたわわに実るとまではいかないものの、やはり人工の無人境の中で味わう果実の甘美さにサン＝ブルーは言及している。

vous [Edouard] comprendrez le plaisir qu'on a de trouver dans ce désert artificiel des fruits excellents et mûrs quoique clairsemés et de mauvaise mine. (pp. 473-4)

また、初めのほうに一連の香草が列挙されているが、これらの香草も、前奏曲のようにエロチズムをかきたてる隠し味となっている。

Le gazon verdoyant, épais, mais court et serré était mêlé de serpolet, de baume, de thym, de marjolaine, et d'autres herbes odorantes. (pp. 472-3)

このほかにも、バラ、リラ、エニシダ等々、エリゼでは、いたるところに官能的な芳香がただよっている。さらに、一歩あゆむごとに足の裏に感じる感触は庭を愛撫しているようでもある。

[...] nous avons sous nos pieds un marcher doux, commode, et sec sur une mousse fine sans sable, sans herbe, et sans rejetons raboteux. (p. 473)

また、エリゼの内部は視界を妨げるほの暗い茂みに満ちている («fourré», «broussailles», «forêt» 等々)。ジュリは「いっさいの魔法よさらば」と言っているが、サン＝ブルーは鬱蒼と茂る植物の迷宮的な混沌が持つ魔力からなかなか自由になれない。カタログのように列挙される植物群は、けっして空間を秩序づけ、見取り図を与えるものではなく、逆に、いっそう混乱の度合いを増し、見通しの利かないまま、サン＝ブルーを庭の奥へ奥へと導いていくのである。サン＝

ブルーの行為は、目に入る植物を列挙することと、それらの間を縫って歩き回ることではない。

エリゼの制作者であるジュリに言わせれば、密生した木々のもたらす暗がり、エリゼを野生の自然に見せかける重要な要素であり、7、8年でできた庭に長い年月を感じさせる決め手でもある。またそれは、庭に清涼な感じを与えもする。しかしそれだけではあるまい。茂みに迷い込む快楽と、暗がりが喚起する密かなる情念の陶醉。庭の内部の薄暗さによって、サン＝ブルーのえもいぬ快感は、いや増してゆくかのものである。エリゼの植物は整然とした幾何学庭園とは異なり、雑然とした多様性による魅力をかもし出しているが、この魅力は、植物を対象として眺める視覚的な効果によって生み出されるよりも、なおいっそう、植物に取り巻かれ、その茂みをかきわけて奥へ奥へと進んでいく眩暈によって生み出されているような印象を受ける。過剰な植物によって上からも下からも取り囲まれたサン＝ブルーは、迷路に迷い込んだように方向感覚を失い、ひたすら植物の名前を列挙すること以外になす術を知らない。彼が感じるのは暗がりと涼気、香草の発する香り、一步踏み出すごとに足の裏に感じる感触、そして、熟した果実の味わい。あたかも混沌とした植物群とのエロチックな戯れそのものであり、木々にからみつくる草のように、あるいは、自ら進んでつる草にからみつかれるかのごとく、サン＝ブルーはその目くるめくエクスタシーに酔いしれている。

それではなぜサン＝ブルーはこれほどまでにエリゼの植物に歓びを見出だすのか。それはエリゼがジュリの作ったものだからだ。今のサン＝ブルーにとっては、エリゼの本質的からくりや社会的な意味合いなど眼中にない。エリゼはジュリが作ったのだからジュリのものであり、エリゼの植物を通じて彼女自身に触れたいとひたすら願うのである。エリゼはジュリの貞節によって作られているのだとヴォルマールにたしなめられても、サン＝ブルーはさして恥じ入る様子もない。依然としてエリゼの植物にかつてのジュリの姿を追い求める空しい努力を、やめようとはしないのである。

サン＝ブルーは翌日、今度はたった一人でエリゼを訪れる。ファンションに代わって鳥に餌をやるという口実で。鍵は、初めファンションのものをあずかせてほしいと願い出るが、ジュリはすぐさま自分の鍵を与える。このことがサン＝ブルーの心に後悔の念を生じさせた。

Aussitôt Julie envoya le sac au grain dans ma chambre et me donna *sa propre clé*.

Je ne sais pourquoi je la reçus avec une sorte de peine : il me sembla que j'aurais mieux aimé celle de M. de Wolmar. (p. 486)

エリゼが持つ、夫婦のプライベートな場所としての意味合いをサン＝ブルーがまったく理解していなかったとは考えにくい。してみれば、エリゼの鍵はジュリの心の鍵でもあるのだ。しかもそのジュリは、かつてサン＝ブルーが愛したままのジュリではなくて、今やヴォルマールに生涯の

忠誠を誓ったジュリなのである。それが痛いほどよくわかっていたからこそ、ヴォルマールの鍵をもらうほうがよかったという後悔が立つのであろう。その前の「つらい気持ち」には二重の意味が読み取れる。ジュリとヴォルマールの夫婦の絆が作り上げたエリゼに、赤の他人である自分が入り込んでいくつらさが一つ。しかしサン＝ブルーは、頭の中では現実を理解し得ても、心の底ではなんとかしてジュリの内にかつての恋人の姿を見出だしたいと望んでいる。ジュリの妻としての貞節の証しというエリゼの最も重要な意味が明らかにされた今、エリゼの庭は現実の関係を思い起こさせるものでしかないはずだ。その鍵を他ならぬジュリから受け取るつらさが一つ。「なぜだかわかりませんが」という言葉は、現実と願望との板挟みになって苦しんでいるサン＝ブルーの心の乱れを示している。結局サン＝ブルーは、情念の誘惑に打ち勝つことができなかった。少なくともエリゼを再び訪れる目的は、自分の置かれた現実を確認するためではなく、昔愛したジュリを再び見出だすためであった。許されざる期待を胸に抱いてエリゼに向かうサン＝ブルーの心の内を生き生きと描き出した箇所を、少々長くはなるが重要なので、段落ごと引用してみよう。

Ce matin je me suis levé de bonne heure, et avec l'empressement d'un enfant je suis allé m'emfermer dans l'île déserte. Que d'agréables pensées j'espérais porter dans ce lieu solitaire où le doux aspect de la seule nature devait chasser de mon souvevir tout cet ordre social et factice qui m'a rendu si malheureux! Tout ce qui va m'environner est l'ouvrage de celle qui me fut si chère. Je la contemplerai tout autour de moi. Je ne verrai rien que sa main n'ait touché; je baiserais des fleurs que ses pieds auront foulées; je respirerai avec la rosée un air qu'elle a respiré; son goût dans ses amusements me rendra présent tous ses charmes, et je la trouverai partout come elle est au fond de mon cœur.
(p. 486)

サン＝ブルーは今なお「無人島」というメタフォールを後生大事に使い続けている。あたかも、人為を否定し、ヴォルマールの管理技術を否定することによって、その影響力から逃れようとしているかのようだ。エリゼから巧妙に隠されている人為を排除すれば、後に残った自然はジュリの自然でもあるだろう。それはすなわち、ヴォルマールの徳に感化される以前、サン＝ブルーに対して燃え盛っていたジュリの情念の炎である。「私をあれほど不幸にした社会的・人為的秩序」とは何か。それは当時の階級社会であり、また、ジュリとサン＝ブルーとの結婚を許さなかったジュリの父の身分的な偏見でもあり、二人の愛の力をもってしても越えることのできなかった障害である。それを追い払うということは、人間社会の都合によって引き裂かれる以前のジュリとの愛の絆（自然の絆）を回復することであり、「自然の甘美なたたずまい」とは、ジュリから愛さ

れる甘美さでもあろう。実際のところ、ジュリの自然は、エリゼが巧みに管理されているのと同様、ヴォルマルの絶大な影響力のもとに置かれている。巧みに隠された人為がヴォルマルの規範的な徳の精神を象徴するものであるとすれば、エリゼの自然はジュリの情念でもあろう。そのような観点からすれば、サン＝ブルーが繰り返しエリゼの植物に野生の自然、あるがままの自然を見ようとするのは、ヴォルマルの束縛、社会の束縛からジュリを自由にし、自分との愛の火を再びともしたいというサン＝ブルーの無意識の欲望が表れているのだというふうに解釈することもできる。現にこの引用の後半部分では、まさしくサン＝ブルーの「心の奥深くに宿るそのままの」ジュリが庭の中に氾濫している。5行目、ジュリは「あれほど愛しかった人 (celle qui me fut si chère)」という表現で指示されている。固有名詞が使われていないのは、ヴォルマル夫人としての現在のジュリを受け入れまいとするサン＝ブルーの意志の、消極的な表れと取れないこともない。その後は代名詞、所有形容詞の多用によって、ジュリの遍在ぶりが示される。サン＝ブルーを取り巻くエリゼの自然——それはとりわけ、あの混沌とした植物であろう——は、現実には彼女が作り出した作品にすぎないが、それを通してサン＝ブルーはジュリの生々しい存在を現出させる。二つの肉体の部分、手と足が、妙になまめかしく、彼女の息づかいまでが感じられるようだ。エリゼの甘美な自然は、社会的・人為的秩序を追い払い、ジュリの肉体と等身大になる。想像の上ではサン＝ブルーは、エリゼの植物を通してその制作者であるジュリを、しかも現実のジュリではなく、昔愛したままのジュリと通じ合うのである。

しかし、エリゼの植物に魅せられたサン＝ブルーの想像上の陶醉も、一時の幻想、気の迷いでしかない。エリゼに再び足を踏み入れたとたん、ヴォルマルの磁力に吸い寄せられるように、サン＝ブルーは現実には引き戻される。

En entrant dans l'Elysée avec ces dispositions, je [Saint-Preux] *me suis subitement rappelé le dernier mot que me dit hier M. de Wolmar à peu près dans la même place. Le souvenir de ce seul mot a changé sur-le-champ tout l'état de mon âme. J'ai cru voir l'image de la vertu où je cherchais celle du plaisir.* (p. 486)

ヴォルマルの最後の言葉とは、「ここ [エリゼ] は貞操の手によって作られているのです」という、例の決定的な言葉にほかならない。言葉の持つ不思議な力によってサン＝ブルーは、クラランにやって来てから初めて、自らの心の内に、ヴォルマル夫人としてのジュリを受け入れるのである。今の引用に続く部分で次のように述べられている。

Cette image s'est confondue dans mon esprit avec les traits de Mme de Wolmar, et pour la première fois depuis mon retour j' ai vu Julie en son absence, non telle qu'elle fut

pour moi et que j'aime encore à me la représenter, mais *telle qu'elle se montre à mes yeux tous les jours*. (p. 486)

クラランに落ちて以来、たとえジュリが目の前にいなくても、サン＝ブルーが心の内で彼女の姿を思い浮かべない時が、一瞬たりともあろうはずがない。彼の性格からしてもそう考えるのが自然であろう。しかしサン＝ブルーが徹底して追い求めていたのは、記憶の中のジュリであった。ジュリがいなくなるときはおろか、現に目の前にいるジュリにさえも、かつてのジュリの面影を見ようとしていたのだ¹²⁾。そして、今初めて、現実のジュリ、あるがままのジュリを、しかも誰に憚る必要もない自分のイマジネーションの中で、認めることができたのである。ここへきてようやく、前日のヴォルマールとジュリによるエリゼの種明かしが功を奏したとすることができるだろう。サン＝ブルーは、三人の子供たちに取り囲まれたジュリを思い浮かべ、そのかたわらに「犯し難い護衛」のようなヴォルマールを、ファンション・ルガールを思い浮かべる。そして自分の情念の罪深さを恥じるのである。

Ah! quel sentiment coupable eut pénétré jusqu'à elle [Julie] à travers cette inviolable escorte? Avec quelle indignation j'eusse étouffé les vils transports d'une passion criminelle et mal éteinte, et que je me serais méprisé de souiller d'un seul soupir un aussi ravissant tableau d'innocence et d'honnêteté! (p. 487)

サン＝ブルーにとって、二日目のエリゼ体験はひとつの試練¹³⁾であったと言えよう。そして、自分一人で「情念の卑しい熱狂を押し殺し」、つらい試練を乗り越えたサン＝ブルーは、予期していたよりもさらに快い夢にひたるのである。

このように、情念の迷いからサン＝ブルーを救ったのは言葉の持つ不思議な力だった。エリゼのエピソードの他の部分でも、サン＝ブルーは同じような言葉の力を感じる箇所がある。鳥たちの子育ての時期がもう終わってしまったのは本当に残念だと言うジュリに対して、サン＝ブルーは、子供のない自分には子育ての喜びはわからないと答える。するとヴォルマールはサン＝ブルーの手を取ってこう言うのである。「あなたには友[ジュリとヴォルマール]があり、その友には子供があるのです。とすれば父性愛があなたに無縁であるはずがありませんか。」この言葉に感動してサン＝ブルーは二人を抱擁するのだが、その時の感じをサン＝ブルーは次のように表現している。

Je ne sais par quel bizarre effet un mot peut ainsi changer une âme. (p. 477)

この場合、言葉がサン＝ブルーの心の中にもたらした効果は即効性のものだが、先程の例では一晩間をおいてから利き目をあらわしている。正確には場所に刻まれた記憶がヴォルマルの言葉と呼び覚ましたと言うべきかもしれない。このような言葉の力については第二章でも少し触れておいたが、結局のところ、エリゼのエピソードにおいて繰り上げられるドラマは、植物に情念の解放を見出だそうとするサン＝ブルーと、それを言葉によって社会的規範に引き戻そうとするジュリとヴォルマルとの対立関係に集約できるのではないだろうか。そしてエピソードの最後では、言葉の力によって、ジュリとヴォルマルの徳の勝利に終わるのである。

おわりに

以上私たちは、エリゼの植物の描かれ方を三つの側面から分析することによって、そこで展開される人間関係の対立・葛藤をありようを考察してきたわけであるが、最終的には、植物を軸として、それを人間社会の論理で貫こうとするヴォルマル夫妻と、そこに個人の情念の解放を見出だそうとするサン＝ブルーとの対立という形に集約できることを確認した。魔術的な力を持った植物によって、エリゼはクラランという人間社会の外部としてサン＝ブルーの前に現れる。サン＝ブルーが魅せられた植物の野生性・自然性は、ジュリやヴォルマルの「見えざる手」による人為性に対立するが、その人為性はジュリがヴォルマルの徳の力で感化されたことを如実に示すものであった。したがってエリゼにおける自然と人為の対立は、情念と徳とのせめぎあいというふうに読みかえることも可能である。またサン＝ブルーは植物の官能性に敏感に反応するが、それは、ジュリの妻としての貞節を象徴するエリゼの社会性・規範性に対する侵犯でもある。結局エリゼのドラマは自然＝情念の誘惑に対する言葉＝規範的秩序の勝利として決着を見せるが、蛇足ながら付け加えておくと、その勝利は必ずしも決定的なものではない。ジュリがずっとサン＝ブルーを愛し続けていたことは、小説の終り、彼女が死ぬ間際に残した手紙によって明らかにされている(第6巻手紙12)。ジュリとサン＝ブルーとの恋愛が死によってしか成就しないものであるならば、エリゼ(極楽浄土)という名前は、そしてその植物にジュリを見出だして歓喜するサン＝ブルーの姿は、あまりに示唆的である。エリゼの植物は、サン＝ブルーにとってもジュリにとっても恋愛がまだ終わっていないことを雄弁に物語っていると言えるだろう。

註

- 1) プレイヤッド版の注釈者ベルナール・ギュイオンは、エリゼを、ジュリの内面の浄化の象徴であ

り、ヴォルマールとの結婚以来いとなんできた新生活 (*vita nuova*) にとってかけがえのない場所であるとしている。(cf. Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres complètes*, tome II, Paris, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1964, p. 1572.)

- 2) 本論中の『新エロイズ』からの引用はすべて、Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres complètes*, tome II, Paris, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1964 に依るものであり、引用文中のイタリックは筆者による。
- 3) ベルナール・ギュイヨンが、第四部全体を「ヴォルマール氏」と題することが可能であると指摘している (cf. *op. cit.*, p. 1571) が、実際サン＝ブルーは、クラランに帰ってきた直後から、ヴォルマールが自分に対して非常に大きな影響力を持ち始めていると洩らしている。
- 4) 小西嘉幸「〈エリゼの庭〉を読む」(I), 『人文研究』, 大阪市立大学文学部, 1980, pp. 30-31。エリゼのエピソードの読解に関しては、この論文から基本的な教えを受けた。
- 5) ヴォルマールとクラランの使用人たちとの間の関係については、“«Vie» et «double-volonté» chez Jean-Jacques Rousseau”と題された中川久定氏の鋭い論考があり、この論文から有益な示唆をいただいた。(cf. Hisayasu Nakagawa, *Des Lumières et du comparatisme*, PUF, Paris, 1992, pp. 135-165)
- 6) ヴォルマールは徹頭徹尾、理性の人であった。ジュリは徳によってヴォルマールに仕えようと努力しているし、最も完全な夫婦であると自負もしている。情によってヴォルマールになびいているとは言えないものの、実際ジュリは、ヴォルマルの意見をことごとく汲み入れて、それを実践する忠実な女として描かれている。

Convaincue de la bonté de sa [Wolmar] *méthode*, je [Julie] tâche d'y conformer en tout ma conduite dans le gouvernement de la famille. (p. 568)

また子供の教育においても、ヴォルマルの方法をジュリが応用するという図式が繰り返される。

Je [Julie] ne fais même en cela [éducation des enfants] que suivre de point en point le système de M. de Wolmar. (p. 578)

- 7) しかしながら、ジュリの戸惑いの中に、サン＝ブルーへの秘められた愛情を読み取ることもできるだろう。夫に対してはすべての秘密を打ち明け、どんな感情も抑えないことを旨とするジュリも、木立ちの接吻のことはヴォルマルに話していなかったのだ。
- 8) *op. cit.*, p. 21
- 9) クルツイウスによるところの、悦楽境の構成要素。(cf. E・R・クルツイウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』, みすず書房, 1971, p. 281)
- 10) *op. cit.*, p. 277
- 11) cf. 川崎寿彦『庭のイングランド』, 名古屋大学出版会, 1983, p. 3
- 12) 明敏なヴォルマルは、サン＝ブルーのジュリに対する恋心に関して次のように述べている。

Le jeune homme [Saint-Preux] ne voyant point dans sa maîtresse [Julie] les changements qu'y faisait le progrès du temps l'aimait telle qu'il l'avait vue, et non plus telle qu'elle était. (p.509)

- 13) 実際ヴォルマルは第四部手紙12において、ジュリとサン＝ブルーの間には「断ち切ってはならない絆が支配している」こと、そしてその愛情は「根絶やしにするよりはむしろ、うまく制御しなければならない」ことを指摘し、結婚以来ジュリを徳によって「癒すこと (guérison)」ができたように、同じ事をサン＝ブルーにも試みようとする意志を明らかにしている。この意味で、エリゼのエピソードもヴォルマルがサン＝ブルーに課した「癒し」のための試練の一つと見なすことができよう。

[付記] 本稿は、文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。